

平成20年度「発達障害早期総合支援モデル事業」報告書（中間・最終）

都道府県名	福岡県
地域名	久留米市
研究期間	平成19～20年度

I 概要

1 研究課題

発達障害のある幼児児童に自立し社会参加するための基礎となる資質や能力を育成するため、久留米市の関係機関が有する支援資源についての情報の共有や関係機関の有機的な連携推進による相談・支援体制を構築し、早期からの一貫した効果的・総合的な支援の在り方について究明する。

2 研究の概要

- ◇「きづき・つながり・はぐくむ」をキーワードとした早期からの総合的な相談・支援体制の在り方の究明
- ・久留米市早期発達支援総合モデル地域協議会の設置
 - ・幼児への教育相談・支援を行う「すくすく発達相談教室」の設置
 - ・関係機関と連携した、就学前の教育相談会や教育講演会の実施
 - ・モデル園における「すくすく発達健康診断（5歳児健康診断）」の実施
 - ・小学校への円滑な移行を促す「就学支援シート」の作成
 - ・ADHDのある小学生へのサマーキャンプ（くるめSTP）の開催

3 研究成果の概要

- ◇小学校入学段階での発達上の課題に対する気づきを促すことができた。
- ・成果指標：小学校入学の際の就学相談会参加率（就学相談会参加者／小学校入学児童数）
平成19年度入学者（研究実施前）：1.87%
平成20年度入学者（研究1年目）：2.51%（H19比：0.64%↑）
平成21年度入学者（研究2年目）：2.12%（H19比：0.25%↑）※ H21.1末段階
- ◇効果があがったと考えられる取組
- ・久留米市早期発達支援総合モデル地域協議会
年3回開催し、各機関が有する支援資源の共有と担当者相互の顔の見える関係づくりがなされ、関係機関が連携した取組が今まで以上にスムーズに進むようになった。
 - ・「すくすく発達相談教室」の設置
年40回開設し、延べ200名（H21.1末段階）の相談があった。相談者のニーズに応じて医療機関や療育機関などの関係機関へのコーディネートを行うことができた。
 - ・教育相談会・講演会の開催
関係機関と連携した小学校就学時の就学相談会を開催し、61名（H21.1末段階）が参加した。また、教育講演会を2回開催（参加者：約650名）し、発達障害についての理解啓発に努めた。

・「すくすく発達健康診断」の実施

モデル園4園において、年中児を対象とした発達健康診断を実施（参加者136名）した。その後のフォローについては、すくすく発達健康診断教室において再相談を実施した。

・「就学支援シート」の作成

就学相談会参加者に対して、小学校入学後に必要な支援情報についてまとめた就学支援シートを作成し小学校に送付することで、小学校への円滑な接続に活用した。

・くるめサマー・トリートメント・プログラム（STP）の開催

教育・心理・医療の関係者が連携し実施するくるめSTPが8月に10日間開催され、ADHDのある小学生23名が参加した。

II 詳細の報告

1 モデル地域の名称

NO	モデル地域名
1	久留米市

2 モデル地域内の幼稚園・保育所・学校数及び幼児児童数

(1) 幼稚園・保育所

モデル地域内の 学校	幼稚園		保育所		合計	
	園数	幼児数	か所数	幼児数	園・か所数	幼児数
久留米市	30	3,998	66	6,802	96	10,800
合計	30	3,998	66	6,802	96	10,800

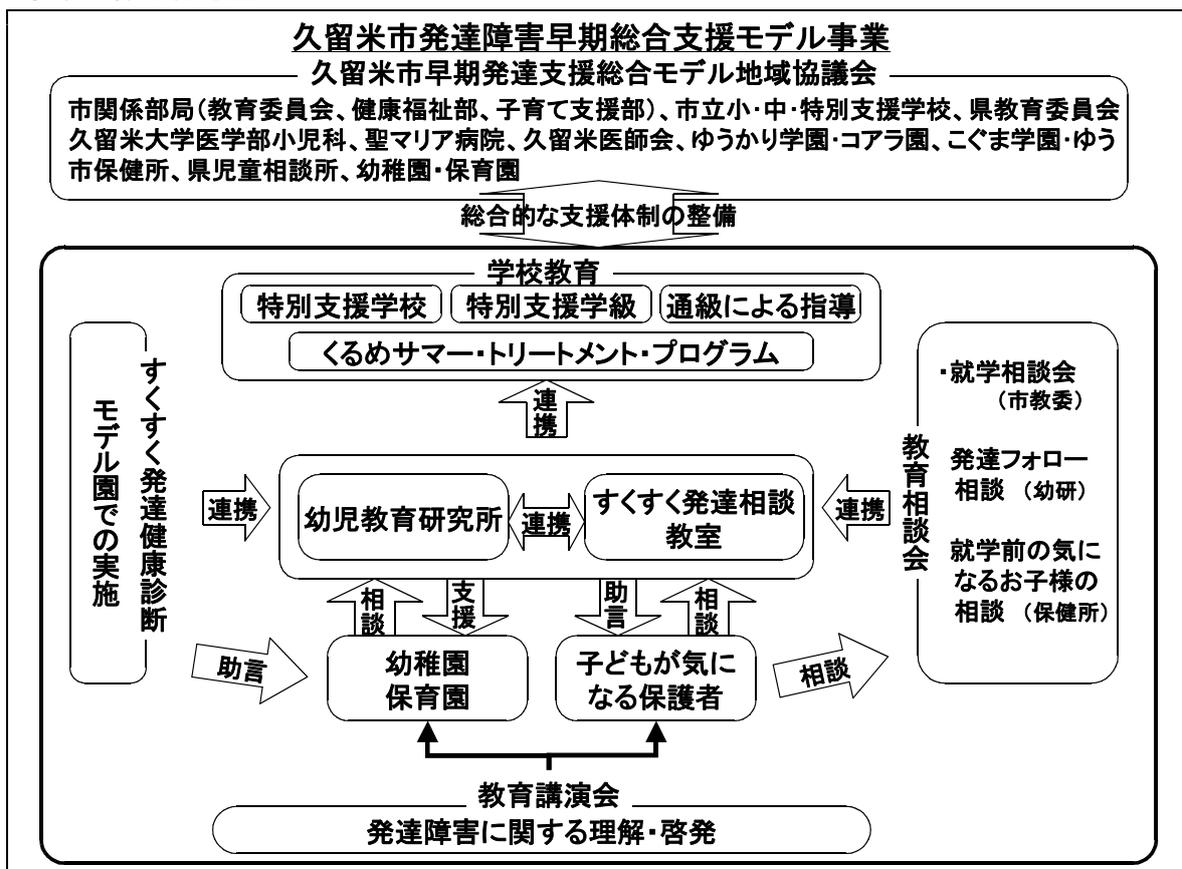
(2) 小学校

モデル地域内の 学校	小学校	
	学校数	児童数
久留米市	46	17,673
合計	46	17,673

(3) 特別支援学校

モデル地域内の 学校	特別支援学校					
	学校数	幼児児童数の内訳		教職員数	コーディネーター数	支援員数
久留米市	1	幼児数	0	75	1	5
		児童数	47			
合計	1	幼児数	0	75	1	5
		児童数	47			

3 事業全体の概念図



4 事業の内容

(1) 久留米市早期発達支援総合モデル地域協議会

ア 構成

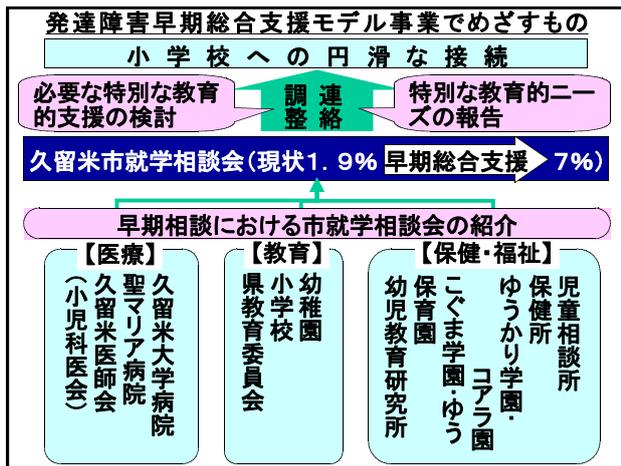
NO	所属・職名	備考
1	大学医学部小児科学教室・准教授	小児神経科医師
2	総合病院・新生児科医師	小児神経科医師
3	医師会・理事	小児科医師
4	小中学校・スクールカウンセラー	臨床心理士
5	県教育委員会・指導主事	
6	私立幼稚園・園長	幼稚園教諭
7	LD・ADHD、情緒障害通級指導教室設置小学校・校長	
8	特別支援学校・校長	
9	LD・ADHD、情緒障害通級指導教室設置小学校・教諭	LD・ADHD通級指導教室担当、言語聴覚士、特別支援教育士スーパーバイザー
10	市教育部学校保健・課長	
11	県児童相談所相談課・課長	
12	社会福祉法人・療育部長	社会福祉士、精神福祉士

13	社会福祉法人・園長	作業療法士
14	私立保育園・園長	保育士
15	市子育て支援部児童保育課・課長	
16	市子育て支援部幼児教育研究所・所長	小学校教諭
17	市健康福祉部障害者福祉課・課長	
18	市健康所健康医療課・課長	

イ 開催回数・検討内容

回数	期 日	主な検討内容
1	平成20年7月8日(火) 15:00～17:00	○委員の任命・委嘱 ○事業内容説明 ○協議内容 ・久留米市発達障害早期総合支援モデル事業研究構想 ・関係機関が有する支援資源についての情報の共有 ・関係機関の連携による早期からの相談・支援体制の整備の在り方
2	平成20年12月16日(火) 13:00～15:00	○協議内容 ・久留米市発達障害早期総合支援モデル事業進捗状況 ・今後の事業展開
3	平成21年2月17日(火) 15:00～17:00	○協議内容 ・平成20年度の事業実績及び事業の成果評価 ・今後の事業展開

ウ 久留米市早期発達支援総合モデル地域協議会における取組の成果と今後の課題



(ア) 成果

- 関係機関が有する支援資源についての情報の共有が図られた。
 - 小学校入学に際して、就学相談会への参加者が増加した。
 - ・平成20年度入学者：2.51% (0.64%↑)
 - ・平成21年度入学者：2.12% (0.25%↑)
- ※ H21.1末段階
- 担当者相互の顔の見える関係が築かれ、ケース会議などの関係機関が連携した取組が今まで以上にスムーズに進むようになった。

(イ) 課題

- 発達障害の早期発見という視点に立った就学時健診の充実を図る必要がある。

(ウ) 対応方法

- 久留米市早期発達支援総合地域協議会を継続し、就学時健診の実施時期及び実施内容についての検討を行う。

(2) 相談・指導教室

ア 「すくすく発達相談教室」構成

NO	所属・職名	備考
1	大学医学部小児科学教室・医師	小児神経科
2	大学医学部小児科学教室・医師	小児神経科
3	LD・ADHD、情緒障害通級指導教室設置小学校・教諭	LD・ADHD通級指導教室担当、言語聴覚士、特別支援教育士スーパーハイザー
4	大学文学部心理学科・非常勤講師	臨床心理士
5	LD・ADHD、情緒障害通級指導教室・学習支援員	介護福祉士
6	大学文学部心理学科・大学院生	臨床心理専攻

イ 「すくすく発達相談教室」の概要

(7) 設置場所及び開設期間

久留米市立南薫小学校なんくん教室（LD・ADHD、情緒障害通級指導教室）内
平成20年4月～平成21年3月（毎週木曜日の午後を基本とする）

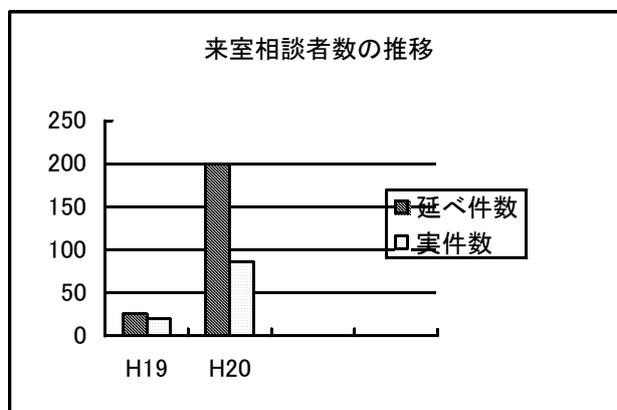
(イ) 対象者及び実施回数等

メニュー	対象者	主な内容	実施回数
1 来室による相談・支援	幼稚園・保育園等の年中・年長児の保護者	毎週木曜日の午後にすくすく発達相談教室において個別の相談・支援を実施する。	40回
2 巡回による相談・支援	幼稚園・保育園の保育者	幼稚園・保育園の要請に基づき、気になる幼児の観察及び支援方法についての助言を行う。	7回
3 巡回による啓発活動	幼稚園・保育園の保育者及び保護者	幼稚園・保育園の要請に基づき、教諭や保育士に対する研修会や保護者学習会において講話を行う。	1回

ウ 主な実施内容

来室による相談者数の推移は、平成19年度が26件であったものが、平成20年度は200件（2月末現在）と7.7倍に増加した。その理由として、2年目は4月から相談を開始したこと、すくすく発達相談教室の広報について、市の広報紙や園を通じての保護者へのお知らせだけでなく、市保健所から直接家庭に送付される予防接種のお知らせの中に広報チラシを入れたこと、などが効果的だったと考える。

また、相談者の年齢ごとの内訳は、次のとおりである。



〈平成19年度 月別年齢別相談者 ※()内は実件数〉

月	未満児	年少	年中	年長	小学生	計
11	0	1(1)	0	2(2)	0	3(3)
12	0	0	2(2)	1(1)	2(1)	5(4)
1	0	0	5(4)	1(1)	6(4)	12(9)
2	0	0	2(1)	0	2(2)	4(3)
3	0	0	0	2(1)	0	2(1)
計	0	1(1)	9(7)	6(5)	10(7)	26(20)

〈平成20年度 月別年齢別相談者 ※()内は実件数〉

月	未満児	年少	年中	年長	小学生	計
4	0	0	0	3(3)	1(1)	4(4)
5	0	2(2)	1(1)	6(6)	6(5)	15(14)
6	0	0	3(2)	2(0)	5(2)	10(4)
7	1(1)	0	5(4)	4(2)	17(9)	27(16)
9	0	0	1	9(3)	17(5)	27(8)
10	2(2)	1(1)	2(1)	7(1)	19(8)	31(13)
11	0	0	1	3(1)	15(3)	19(4)
12	0	1(1)	1(1)	4(2)	8(2)	14(6)
1	0	0	4(3)	7(1)	17(4)	28(8)
2	1(1)	1	5(2)	5(2)	13(4)	25(9)
計	4(4)	5(4)	23(14)	50(21)	118(43)	200(86)

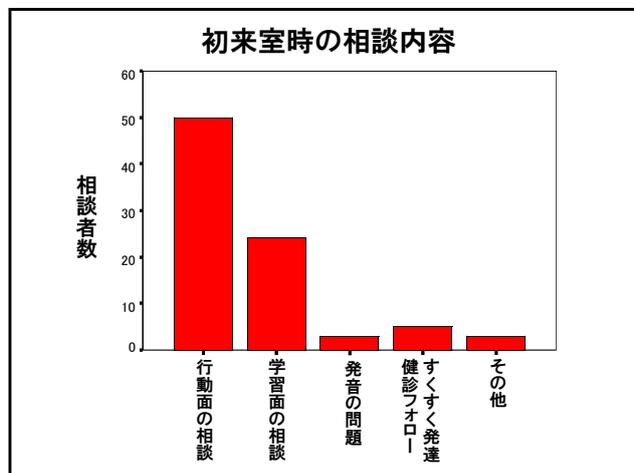
相談に来た子どもたちの男女比は、3.2 : 1の割合で男子の方が多い。

すくすく発達相談教室は、本来は就学前の年中・年長の子どもたちを中心に相談・支援を行うこととしていたが、実際には就学後の相談が約51%を占めた。これは、通級指導教室に相談があった小学生への対応を、すくすく発達相談教室と連携して行ったためである。その中で、約68%が小学校3年生までの子どもたちあり、小学校入学後に切実な気づきをもたれるケースが数多くあること、その気づきも低学年に集中していることがわかる。

今後の早期発見・早期支援の取組により、就学後の気づきをできるだけ早い時期にもてるようにするとともに、小学校入学後の特別支援教育の充実が一層求められている。

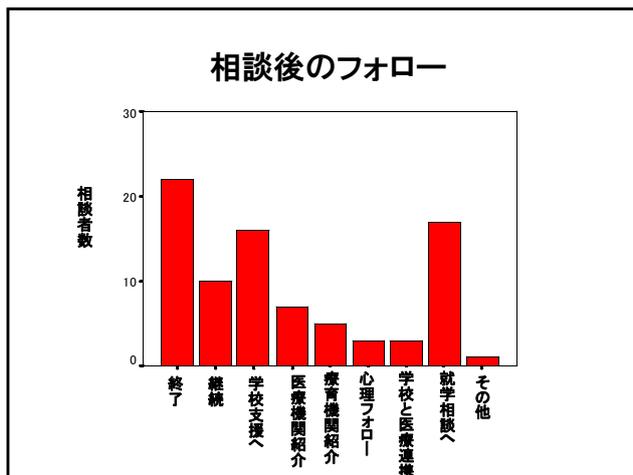
初めて来室した相談者の相談内容は、右のグラフのとおり、最も多いものが「行動面の相談」次に「学習面の相談」「すくすく発達健康診断からの紹介」「発音の問題」と続いた。

これまで未診断で、すくすく発達相談教室で診断が行われた結果は、疑いを含めると自閉症が最も多く、次に精神発達遅滞、境界線知能、ADHD、構音障害などが続き、発達障害の疑いのある子どもた



ちが多くを占めた。

すくすく発達相談教室に相談後のフォローは、右のグラフのとおり、終了が最も多く、学校や園における環境調整などの支援、教育委員会の就学相談会の紹介、などが続いた。また、関係機関との連携について、医療機関や療育機関の紹介も行った。



すくすく発達相談教室を利用した保護者の声や保育園の声から、気づきを持ち

不安を感じていたこと、支援者をつなげたことで今後、子育てに対する自信をもつことができたことなどを感じとることができる。

〈すくすく発達相談教室利用者の声〉

話し合いでのアドバイス、自分たちの困っていること、今までの対応・・・、初めて真剣に考える機会をもったことに気づきました。

今までも困っていた悩んでいたのですが、深く考えたことがなかったので先延ばしにしていたのですね。今回、本人の理解がないためできないのか、わがままでしたくないからしないのか・・・、この二点で本人を見るようになり、伝える、教える自分もとても楽になりました。何となくしか見えてなく、親も自信をなくしたり混乱していたと思います。今からですが、色々気付いたりする中で我が子が自信をもって生活できるように支えて行きたいと思っています。

〈すくすく発達相談教室巡回相談・支援を利用した園の声〉

気になる子どもの園での様子を見てもらい、保育士のかかわりや環境構成、就学に向けての支援の在り方などについて相談しました。

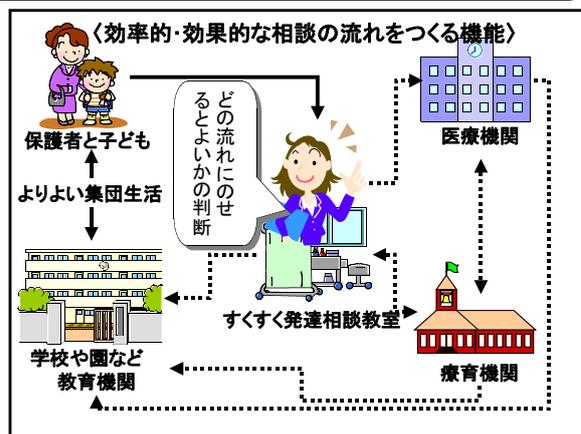
年齢という枠にとらわれすぎずに、個々の発達に応じたかかわりの重要性を再認識する機会となったこと、保育・環境構成等の取組について客観的に評価してもらい、効果があがっている点や今後の課題が明確になったこと、入学に向けて不安を抱えている保護者に向けての支援をしていく上で、具体的な支援方法を学ぶ機会になったこと、などが成果だと感じています。

エ 成果と課題

(7) 成果

すくすく発達相談教室での来室相談や巡回による相談・支援などの取組を行った結果、次のような機能が明らかになった。

- 支援資源をコーディネートして効率的・効果的な相談の流れをつくる。
- 小学校で相談できるため、保護者にとって相談の垣根が低くなる。



- 医療と教育の連携を推進する。
- 各種相談に対するセカンド・オピニオンを出す。
- 大学病院受診の待機時間（6ヶ月程度）を有効に使う。
- 保護者支援（特に母親の抑うつ傾向への対応）を行うことができる。

(イ) 課題

- 発達上の課題に対する気づきをできるだけ就学前に促すことに取り組んだが、実際には小学校3年生までに気づきをもつ事例も数多くあり、今後、対象を年中から小学校低学年まで拡大して相談・支援を行う必要がある。
- 実践の結果明らかになった6つの機能を前提とした、すくすく発達相談教室運営の充実を図る必要がある。

(ウ) 対応方法

- 市単独の経費によるすくすく発達相談教室の継続を行い、発達上の課題に対する気づきを促すとともに、関係機関と連携した効率的・効果的な相談・支援の流れをコーディネートする。

(3) 教育相談会・講演会

ア 教育相談会・講演会の概要

(ア) 教育相談会について

相談会名	開催回数	内容	対象者	参加人数	助言者等
市就学相談会	11月 3回	小学校就学に際しての相談	小学校入学予定の幼児及びその保護者	61人	医師5名 大学教授1名 幼児教育研究所所長1名 小学校通級指導教室担当教諭2名 特別支援学校校長1名 特別支援学級設置校長3名 特別支援学校教諭1名 特別支援学級担当教諭7名

(イ) 教育講演会について

演題	開催回数	内容	対象者	参加人数	講師
健やかな発達のために	2月	発達障害の理解と支援についての啓発	教育、医療、保健、福祉関係者及び就学前の幼児をもつ保護者等	約500人	北海道大学大学院教育学研究院教授 田中 康雄 先生
すべての子どもの学びと育ちを保障する	8月			約300人	岡山大学教授 佐藤 暁 先生

授業づくり					
新しい子どものこころの発達臨床～教育との連携～	2月			約350人	あいち小児医療保健総合センター保健センター長兼心療科部長 杉山 登志郎 先生

イ 成果と課題

(7) 成果

- 市教育相談会においては、発達上の課題についての保護者の理解及び円滑な小学校就学に向けての連絡調整を行うことができた。
- 関係機関との連携により、市就学相談会への参加者が増加した。

小学校入学年度	入学者総数	就学相談会参加者	参加率	H19比
平成19年	2,938人	55人	1.87%	—
平成20年	2,904人	73人	2.51%	0.64%
平成21年	2,876人(推計)	61人(1月末現在)	2.12%	0.25%

- 2年間で3回開催した教育講演会に約1,150人の参加があり、発達障害に関する理解啓発を進めることができた。

(イ) 課題

- 小学校入学の段階で、以前、発達上の課題への気づきをもたれていない子どもが約4%程度いることから、さらに気づきを促す取組を進める必要がある。
- 市就学相談会の在り方について、小学校等への連絡調整機能を強化する必要がある。

(ウ) 対応方法

- 久留米市早期発達支援総合地域協議会を継続し、関係機関との連携強化に努める。
- 平成20年度から取り組んだ「就学支援シート」の各小学校における効果的活用を促す。

(4) 早期発見・早期支援

ア 早期発見

(7) モデル地域内での具体的な取組

モデル園（幼稚園2園、保育園2園）において、「すくすく発達健康診断（5歳児健康診断）」を実施した。

〈すくすく発達健康診断従事者〉

- 小児科医師・・・健診の内容監修、診察の実施、スタッフへの助言
- 保健師・・・行動観察、全体的な保育環境の観察
- 臨床心理士・・・行動観察
- 指導主事・・・園との連絡調整、健診結果の整理・報告

〈すくすく発達健康診断の流れ〉

- 問診票及びSDQ質問紙による事前調査

■ 健診当日のスケジュール

- ・ 9:00・・・スタッフ集合
- ・ 9:00～9:15・・・診察対象児とスケジュールの確認
- ・ 9:15～10:15・・・個別診察
- ・ 10:15～11:00・・・保育観察
- ・ 11:00～12:00・・・健診結果のカンファランス（健診結果の総合的な判断及び保護者への通知内容の検討）
- ・ 12:00～12:30・・・園への申し送り

■ 後日、検診結果の保護者通知

健診の結果、何らかの発達上の課題が疑われる「要再相談」の子どもは、全体の5.9%で、この数値は、文部科学省の調査における通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある子どもの割合6.3%と近い数値となった。

〈平成20年度すくすく発達健康診断の結果〉

園名	年中児	参加者	診察対象	問題なし	要助言	要再相談			
A幼稚園	61	53	86.9%	14	26.4%	45	5	3	5.7%
B保育園	21	21	100.0%	10	47.6%	15	3	3	14.3%
C保育園	29	29	100.0%	13	44.8%	22	6	1	3.4%
D幼稚園	33	33	100.0%	7	21.2%	28	4	1	3.0%
計	144	136	94.4%	44	32.4%	110	18	8	5.9%

健診を実施したモデル園からは、子どもを見つめ直すよい機会になったという声が聞かれた。

〈すくすく発達健康診断実施園の声〉

成果としては、障害のある子どもとの関わり方、環境構成、配慮など、専門的などから今までの成果やこれからの課題を具体的に示していただいた事で、今後の保育のあり方が明確になってきました。また、問診票で一人ひとりの姿を確認する際に、細かく把握できていないことに気づき、そのことを踏まえた上で子どもの現状を知ることができました。

保護者にとっても、結果を全員に通知されたことにより、安心されたり、助言していただいたことで、子どもへの見方や関わり方を見直す機会にもなったようです。また、子育てに悩んだ時、気軽に園を通じてでも相談できる公共の機関（すくすく発達相談教室など）があるということで安心もできたようです。

(イ) 本年の成果

- すくすく発達健康診断（5歳児健診）の問診票や行動観察記録用紙等の作成を行うとともに、半日で健診を終了するための効率的な実施方法を明らかにすることができた。
- 健康診断という積極的な対応により、保護者や幼稚園・保育園の保育者に対しての発達上の課題に対する気づきを促すことができた。

(ウ) 課題と今後の方針

- すくすく発達健康診断（5歳児健診）の一般化に向けた実施方法の検討を行う。
- 乳幼児健康診断や就学時健康診断との連携を強化する。

○就学時健康診断の在り方の見直しを行う。

イ 早期支援

(ア) モデル地域内での具体的な取組

○すくすく発達相談教室から幼稚園・保育園に対して巡回による相談・支援を実施した。

○ADHDのある小学生に対して、教育・心理・医療が連携した「くるめSTP（サマー・トリートメント・プログラム）が実施された。

実施期間	参加者	指導者等
8月11日～22日（土 日を除く10日間）	ADHDのある小学生23名	小児神経科医師3名 臨床心理士8名 看護師2名 小学校等教諭18名 心理学科大学生・大学院生16名 看護学科学生5名

(イ) 本年の成果

○巡回による相談・支援や発達フォロー相談により、障害の特性に応じた保育の具体化に努めることできた。

○久留米市教育センターにSTP研究班を立ち上げ、STPに小・中・特別支援学校教員が参加することにより、ADHD児に対する指導法の専門性を向上させることができた。

○ADHD児に対する教育・心理・医療が連携したプログラムの実施方法が明らかになるとともに、参加児童の自尊感情の向上を図ることができた。

〈STP参加児童の保護者の声〉

不安な気持ちの中にも大きな決意を持って参加したサマースクールの最終日が近づく頃には“もっとみんなと遊びたい”“もっとみんなと話がしたい”と仲間意識が芽生えたようです。きっと自分と同じように悩み苦しみ頑張っている皆さんと過ごした時間が息子に勇気を与えてくれたのだと思います。私もあんなに多くを考え、1つの課題にむかう息子を見たのは初めてでした。そしてあの子の口から「自分が見える」との言葉がありました。漠然とした言葉ですが、何かをつかんだんだとあの子を見て感じた瞬間を今でも覚えています。

それから7ヶ月経った今でも、息子は努力の先に喜びがある事を忘れずにいます。失敗して泣いた事もあります。でも「一度は失敗とは言わない」と伝えると、また目標に向かう事が出来るようになっていきます…。

(ウ) 課題と今後の方針

○市幼児教育研究所と連携して、幼稚園・保育園に対する巡回相談・支援の充実を図る。

○STPの効果を持続させるためのフォローアップ・プログラムの開発やペアレント・トレーニングの実施に努める。

○久留米市教育センターSTP研究班で、各学校で一般化できるSTPのノウハウについてまとめた冊子を作成し、各学校の指導方法の工夫改善に生かす。

(5) 学校等への円滑な移行方法の工夫（就学相談等を含む）

ア モデル地域内での具体的な取組

市教育委員会は、就学相談会において話し合われた専門家からの意見や保護者との話し合いの内容など、子どもの円滑な小学校への接続と入学後の学校生活へのよりよい適応を支援するための情報を記載した「就学支援シート」（様式については別紙資料を参照）を作成し就学予定の学校にひきついだ。この就学支援シートは、「保護者記入欄」「園記入欄」「教育委員会記入欄」の三つのページで構成する。作成及び学校への報告の手順は、次のとおりである。

〈「就学支援シート」作成の手続き〉

- ① 教育委員会は就学相談会の内容を「教育委員会記入欄」に記載し、保護者へ郵送する。
- ② 保護者は「教育委員会記入欄」を読み、内容がOKであれば、「保護者記入欄」の記載及び在籍園に「園記入欄」の記載依頼を行う。
もし、「教育委員会記入欄」に修正が必要な場合は、朱書き修正を行い、教育委員会へ返送する。この場合、教育委員会は、「教育委員会記入欄」の修正を行い、再度、保護者に郵送する。
- ③ 保護者は、「保護者記入欄」「園記入欄」が記入された就学支援シートに署名捺印の上、教育委員会へ返送する。
- ④ 教育委員会は、返送された就学支援シートを入学予定の学校にひきつぐ。

イ 本年の成果

○就学相談に参加した小学校就学全児童について「就学支援シート」を作成し、小学校への引き継ぎを行うことができた。

ウ 課題と今後の方針

○「就学支援シート」について、その効果を、小学校入学後の子どもたちの集団生活への適応状況や個別の教育支援計画、個別の指導計画への活用などから検証していく必要がある。

(6) その他特記事項（エピソード等を含む）

すくすく発達健康診断の結果、再相談を勧める場合は文書による結果通知だけでなく、教育委員会担当者が再相談の必要性について丁寧に説明を行うこととした。その際の保護者との面談をとおして、これまで私たちが考えていたことに誤りがあることに気づくことができた。

これまで、学校や園の先生と発達上の課題への気づきの話をすると「学校や園は気づいているが、保護者の気づきがないことが問題である」という声が聞かれたが、全てがそうではないというケースに出会うことができた。

今回、面談して話した保護者の多くについて、園は気づきをもっていないと思っていたが、実際に話をすると、気づきをもっていたというケースもいくつかあった。気づきをもっていたが、その不安を伝えられないという大きな悩みを抱えられ、時には涙を流して我が子のことを話された方もいた。

発達障害のある子どもの支援に携わる者は、このような保護者もいることを念頭に置き、子どもが直面している「困り」によりよそいながら、共感的に理解していくよう心がける必要があると考える。

(7) 総括

平成19・20年度の2年間の取組をとおして、早期からの発達上の課題に対する気づきを促すことができたと考える。その成果指標として、小学校入学時の就学相談会の参加の割合（就学相談会参加者数／小学校入学者数）である「就学相談会参加率」で検証を行ったが、その結果は、取組に着手する前の平成19年度入学者の1.87%に対して、平成20年度入学者が2.51%、平成21年度入学予定者が2.12%となり、平成19年度と比べるとそれぞれ、0.64%、0.25%の伸びがみられた。

このことから、次のような取組の効果があがったためだと考える。

〈「久留米市早期発達支援総合モデル地域協議会」の設置〉

- それぞれの関係機関がもつ社会資源についての情報を互いに共有できたこと
- 担当者相互の顔の見える関係が築かれ、ケース会議などの関係機関が連携した取組が今まで以上にスムーズに進むようになったこと
- 地域協議会のネットワークの中で、小学校への円滑な接続を図るための就学相談会への紹介が行われたこと

〈「すくすく発達相談教室」の設置〉

- 就学前から小学校3年生までを中心にきめ細かな相談・支援が実施されたこと、その結果、園や学校での集団生活へのよりよい適応をうながすことができたこと
- 関係機関との連携について、相談者のニーズに応じた社会資源のコーディネートが行えたこと
- 「すくすく発達相談教室」の機能として、当初想定していたもの以外に、相談についてのセカンド・オピニオンを出す、大学病院受診の待機時間を有効に使う、母親支援を行うことができる、などが明らかになったこと
- 巡回による相談・支援の実施により、子どもが困りを感じている現場での相談・支援を行えたことや、各園のすぐれた取組に接することができたこと

〈「すくすく発達健康診断」の実施〉

- 2年間のモデル園での実施の結果、効率的な実施方法が明らかになったこと
- 結果通知に際しては、共感的に気づきをうながすことが大切であること
- 実際には既に気づきをもたれてあるケースもあり、それを話せない不安や悩みを抱えている保護者がいることを学校や園は念頭に置いておく必要があること

〈「くるめSTP」の実施〉

- 教育・心理・医療が連携した、きめ細かなプログラムが提供されたことにより、2週間の中で確かな子どもの変容があったこと
- 参画した教師が自己の学校での指導を振り返るとともに、行動療法の考え方を学ぶ機会

ともなり、人材育成の上でも意義があったこと

〈「就学相談会」の開催〉

- 関係機関との連携により、就学相談会参加率が向上したこと
- 就学相談会の参加者全員に「就学支援シート」を作成し、小学校への引き継ぎを行ったこと

しかし、今後さらに、次のような点について、取組の充実を図る必要があると考える。

- ① 「すくすく発達相談教室」については、明らかになった役割や機能を前提に、関係機関との有機的な連携をさらに進める教室運営を図る必要がある。
- ② 「すくすく発達健康診断」については、モデル園における効率的な実施方法は明らかになったが、久留米市のような中核市の規模で全ての園での実施は困難である。今後、既存の健診の在り方を見直すなど、「すくすく発達健康診断」のノウハウをより広く生かしていく方法について検討を行う必要がある。
- ③ 就学相談会参加率は向上したが、2%程度にとどまっており、依然、気づきをもたれることなく小学校に入学し、困りを感じている子どもたちが多くいると思われる。今後さらに関係機関との連携を進めることで、円滑な小学校への接続を図る必要がある。あわせて、今回初めて作成した「就学支援シート」について、その効果を、小学校入学後の子どもたちの集団生活への適応状況や個別の教育支援計画、個別の指導計画への活用などから検証していく必要がある。